

干瀉東畑遺跡

—福岡県小郡市干瀉所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書第258集

2011

小郡市教育委員会

干 瀉 東 畑 遺 跡

—福岡県小郡市干瀉所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書第258集

2011

小郡市教育委員会

＜序 文＞

本書は、小郡市干潟において計画されました「立石・下鶴 4080 号線道路改良工事」に先立ち、小郡市教育委員会が実施しました干潟東畑遺跡の発掘調査の記録です。

調査地は、小郡市のほぼ中央を南北に貫流する宝満川の東側、小郡市干潟地内に所在します。遺跡からは、古代の竪穴住居跡、掘立柱建物など生活の痕跡が発見され、当時の土地利用の様子が窺えました。

このように埋蔵文化財は、地域の歴史を明らかにする上で欠かす事の出来ない貴重な文化遺産です。本書が文化財に対するご理解、更には教育及び学術研究の一助となれば幸いです。

最後に、地権者の重松ヨシエさん、さらには調査にご理解とご協力をいただいた周辺住民の皆様、そして現地作業にあたった地元作業員の皆様など、発掘調査を進める際にお世話になった多くの方々に感謝を申し上げ、序文といたします。

平成 23 年 3 月 31 日

小郡市教育委員会
教育長 清武 輝

＜例 言＞

1. 本書は、小郡市干潟地内における「立石・下鶴 4080 号線道路改良工事」に伴い、小郡市教育委員会が発掘調査を行った干潟東畑遺跡の報告書である。
2. 調査期間は、平成 21 年 12 月 1 日から平成 22 年 1 月 29 日まで実施した。
3. 調査面積は、630 m²である。
4. 本調査は、坂井貴志が行った。
5. 遺構の個別実測は坂井が行い、遺構全体図の作成及びデジタルトレースは、(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
6. 遺構の個別写真撮影は坂井が行い、遺跡全景写真は (有) 空中写真企画に委託した。遺物写真の撮影は(有)文化財写真工房・岡紀久雄氏に委託した。
7. 遺物の復元・実測・製図には、担当者の他、白木千里、柳美保幸、衛藤知嘉子、佐々木智子、原野照子、井上千代美、永倉さゆみ、長野智恵子ら諸氏の多大なる協力を得た。
8. 本書に記載した遺構略号は、C：竪穴住居跡、B：掘立柱建物、K：土坑、P：ピットである。
9. 遺構実測図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に則している。
10. 遺物・実測図・写真は、小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管・管理している。
11. 本書の執筆・編集は、坂井が行った。

<本文目次>

第1章	調査の経過と組織	1
第2章	位置と環境	1
第3章	調査の内容	
	1 調査の概要	5
	2 遺構と遺物	
	(1) 竪穴住居跡	5
	(2) 掘立柱建物	6
	(3) 土坑	9
	(4) ピット	17
第4章	調査の成果	19

<挿図・表目次>

第1図	干潟東畑遺跡 周辺遺跡分布図 (S = 1/25,000)	2
第2図	干潟東畑遺跡 調査区位置図 (S=1/2,500)	2
第3図	干潟東畑遺跡 遺構配置図 (S=1/200)	3
第4図	1号竪穴住居跡実測図 (S=1/40)	6
第5図	2号竪穴住居跡実測図 (S=1/40)	7
第6図	竪穴住居跡出土遺物実測図 (S = 1/4)	7
第7図	1号掘立柱建物実測図 (S=1/40)	8
第8図	2号掘立柱建物実測図 (S=1/40)	9
第9図	1・2・3・5号土坑実測図 (S=1/40)	10
第10図	4・6・7号土坑実測図 (S=1/40)	12
第11図	8・9・10号土坑実測図 (S=1/40)	13
第12図	11号土坑実測図 (S=1/40)	14
第13図	1・2・5～7・9・11号土坑出土遺物実測図 (S=1/4)	15
第14図	13号土坑実測図 (S=1/40)	16
第15図	13号土坑出土土器実測図 (S=1/4)	17
第16図	ピット出土遺物実測図 (S=1/4)	18
第1表	出土遺物観察表	20

<図版目次>

図版1	調査区より東を望む、干潟東畑遺跡調査区全景
図版2	1号住居土層・貼床検出・完掘、2号住居完掘、1・2号掘立柱建物全景、1号土坑土層・完掘
図版3	2号土坑土層・完掘、3号土坑土層、4・6号土層・完掘
図版4	7～10号土坑土層・完掘、11・13号土坑土層
図版5	竪穴住居跡・土坑出土土器
図版6	土坑・ピット出土土器

第1章 調査の経過と組織

干潟東畑遺跡の調査は、「立石・下鶴 4080 号線」道路改良工事に先立ち平成 18 年 12 月 12 日付で小郡市役所都市建設部道路建設課より同市教育委員会に対して埋蔵文化財の照会があったことを端緒とする（審査番号 6072）。これを受けて、平成 20 年 11 月 25 日に試掘調査を行った結果、現地表面下部 30～50cm にて遺構が確認された。教育委員会は、都市建設部道路建設課へ本調査が必要であると回答し、協議の上平成 22 年 12 月 2 日より発掘調査を開始することとなった。

調査費用に関しては、道路建設課より教育委員会文化財課が予算の執行委任を受けて、調査を行った。

調査体制は以下の通りである。

[道路建設関係]

<小郡市都市建設部>

部 長	池田 清巳
道路建設課 課 長	佐藤 吉生
道路建設係 係 長	松井 秀章
	山口 浩一

[発掘調査関係]

<小郡市教育委員会>

教育長	清武 輝
教育部長	高木 良郎（平成 21 年度）
	河原 寿一郎（平成 22 年度）
文化財課 課 長	田竈 千代太
係 長	片岡 宏二
嘱託技師	坂井 貴志

<発掘作業従事者>

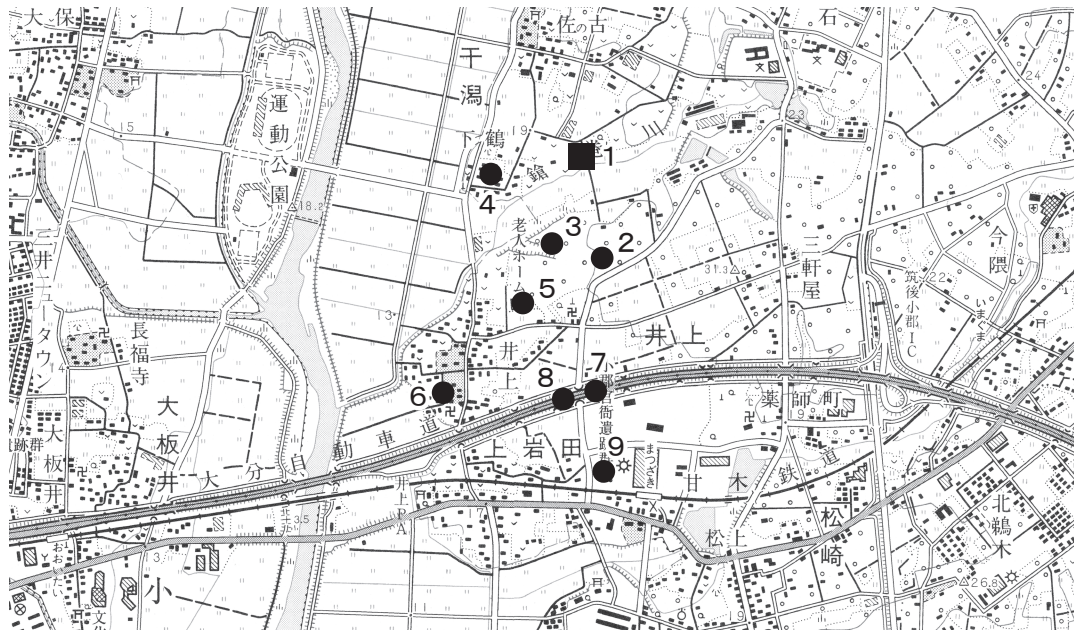
横田 雅江、草場 誠子、土井 久江、松本 スマ子、野田 美根子、荒巻 国利、野田 博文

第2章 位置と環境

小郡市を大きく分けると、市中央部を南流する宝満川流域の平坦地、西北部の通称三国丘陵と呼ばれる低丘陵地、そして今回調査した遺跡が位置する北東部の台地に分けられる。北東部には花立山があり、広大な裾野は洪積層から成る標高 20 m 程の台地である。干潟東畑遺跡は、その台地上、宝満川の支流である鎗巻川によって開析された段丘崖沿いに立地する。

周辺には、井上北内原、南内原 1・2・3（5）、井上小松山 1・2（2）同 3・4（3）等の遺跡が存在している。井上北内原遺跡は、弥生時代と古代の複合遺跡で、中心は弥生時代の住居跡・甕棺墓・祭祀土坑等である。古代の遺構としては、古墳時代後期の住居跡 9 軒等が確認された。井上小松山遺跡は、現在までに 4 次の調査が行われている。第 1・2 次調査では落し穴状遺構等が検出され、第 3・4 次調査では弥生時代中期の堅穴住居・祭祀土坑、古墳時代前期の住居跡や同後期の掘立柱建物等が確認された。また、当遺跡より西に約 300 m の地点には、大正時代に発見・調査された古墳時代前期の下鶴古墳（4）が位置する。

この地域の歴史を語る上で欠かすことが出来ないのが、当遺跡より南に 1 km 程に位置する上岩田遺跡（9）の存在である。瓦葺き建物を戴く基壇状遺構、御原郡評と推定される官衙的様相を持つ大型掘立柱建物群、道路状遺構等が検出された。時期は 7 世紀後半以降が中心となる。また、その北西には 8 世紀代の古代寺院井上廃寺（6）が存在する。なお、上岩田遺跡の北側に隣接した本来同一の遺跡である薬師堂東遺跡（7）・井上薬師堂遺跡（8）等も存在し、これらの遺跡を営んだ集団が 7・8 世紀における当地域の中心勢力となることは言うまでもない。その中で今回確認された集落跡の調査意義は大きく、地域の発展の過程を考える上で重要な成果となろう。

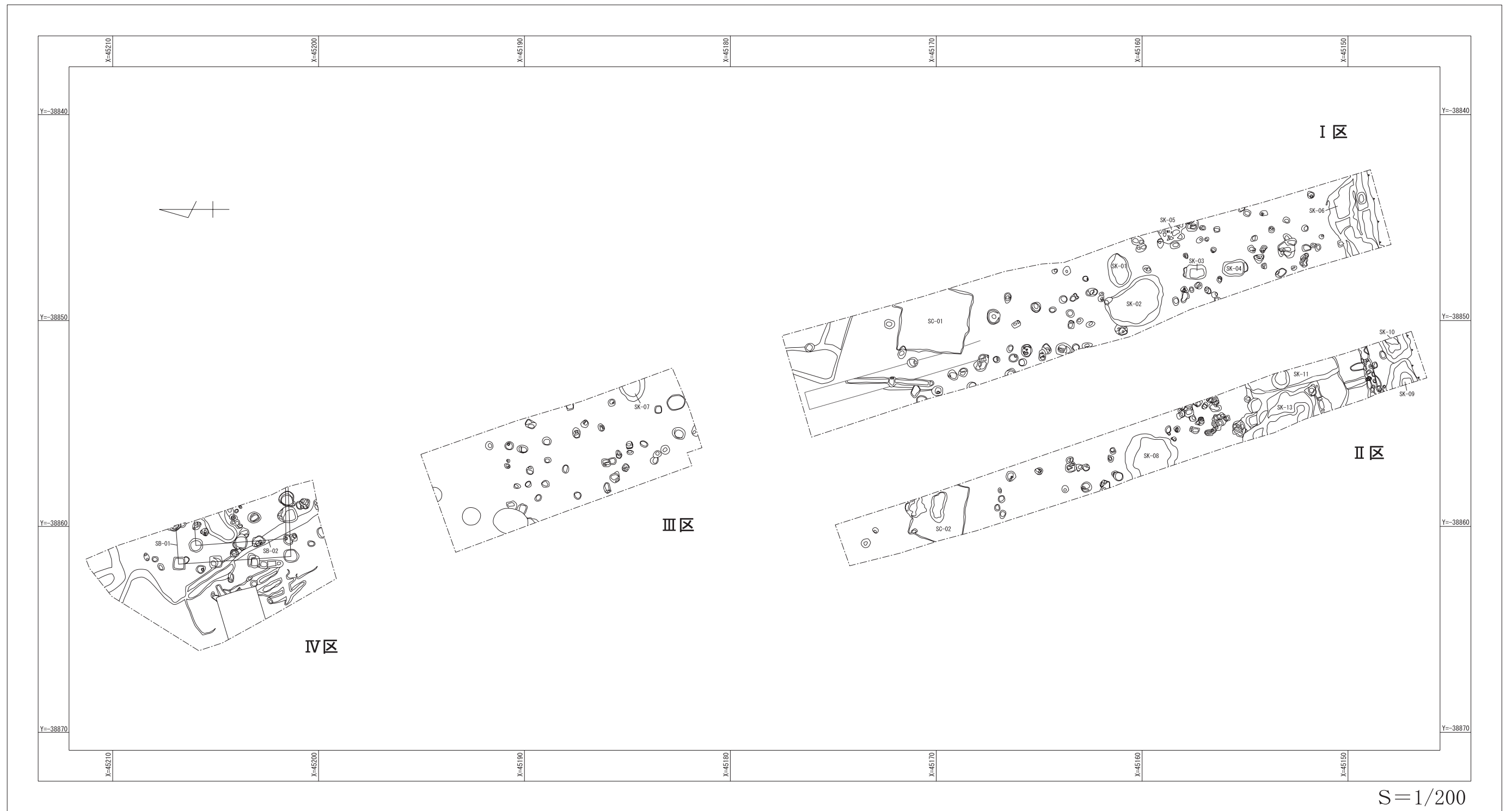


1. 干潟東畑 2. 井上小松山1・2 3. 井上小松山3・4 4. 下鶴古墳
 5. 井上北内原、井上南内原1・2・3 6. 井上廃寺 7. 薬師堂東 8. 井上薬師堂
 9. 上岩田

第1図 干潟東畑遺跡周辺遺跡分布図 (S = 1 / 25,000)



第2図 干潟東畑遺跡調査区位置図 (S = 1 / 2,500)



第3図 干潟東畑遺跡全体図 (S=1/200)

第3章 調査区の内容

1 調査の概要

干潟東畑遺跡の総調査面積は630 m²である。耕作地であることと、その耕作地造成のために大幅に削平を受けており、遺構の残存状況は良好とは言えない。

調査地は、南に流れる宝満川支流の鎗巻川に向かう段丘の斜面上に位置する。

調査区は、南よりⅠ区～Ⅳ区と設定した。遺構検出面は、北部のⅣ区から南部のⅠ・Ⅱ区にかけて緩やかに傾斜する(18.70 → 16.30m)。遺構は、地山面で検出し、基本層序は耕作土、暗灰色の造成土、遺物を多量に含んだ淡黒色土(包含層)、茶褐色土または暗茶褐色土の地山となる。

検出した遺構は、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡2棟、土坑12基、ピット多数である。

遺物は、土師器が大半を占めており、須恵器は数点出土した。

2 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡(第4図、図版2)

1号住居跡は、Ⅰ区北側にて検出した。北東隅が調査区外に掛かるが、3.1 m × 3.0 mの正方形を呈する。若干の削平を受けており、床面までの深さは、約19cmと浅い。その下に黄褐色土ブロック混じりの淡黒褐色粘質土で、4～10cmの貼床が施され略水平に仕上げている。遺構内には数基のピットが検出されたが、どれが支柱穴となりうるかは不明である。

北東隅において住居壁体から外側へ約50cm突出しており、また床面においても焼土の広がりや確認できたことからカマドの残骸であると思われる。また、南東隅付近はよく掘り込まれる。

出土遺物(第6図、図版5)

出土土器量は非常に少ない。

1は、カマド周辺の床面上から出土した土師器坏である。精製品で器高2.5cmを測る。内外面は回転ナデ、底部外面は手持ちヘラケズリを施す。橙色を呈し、口唇部がやや内傾する。

2号竪穴住居跡(第5図、図版2)

2号住居跡は、Ⅱ区北側にて検出した。北東・南西隅が調査区外に掛かるが、一辺が3.0 m程の正方形を呈するものと思われる。貼床面を超えて大きく削平されているため、下層掘り込みのみの検出となった。

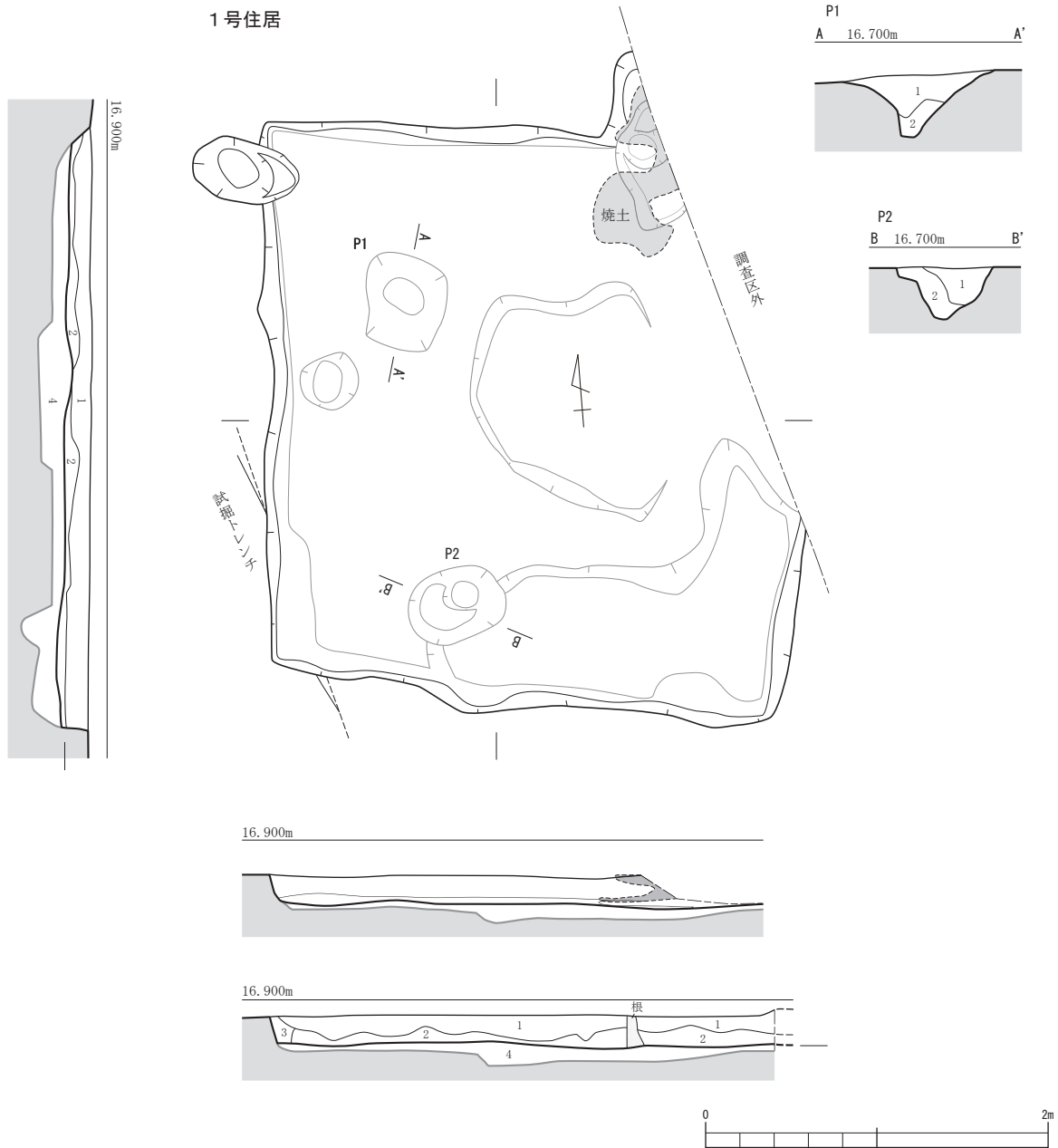
北壁中央においては、住居壁体より約40cm突出しており、焼土の広がりが若干ながら確認された。カマドの残骸であろうと思われる。

また、1号住居跡とは軸を同じくしており、企画性が窺えるものである。

出土遺物(第6図、図版5)

出土土器量は少ない。

2は、土師器甕口縁～胴部にかけての破片である。復元口径29.1cmを測り、大型のものである。外面ハケメ、口縁部内外面はヨコナデを施し、内面頸部以下はヘラケズリで調整し明瞭な稜ができている。また、内面はススが付着する。



1号住居

- 1 淡黒色（淡橙色、茶色粒子混入）
- 2 1層+淡茶褐色土
- 3 1層と似るがややしまる
- 4 淡黒褐色粘質土（黄褐色粘質ブロック混入、しまりあり、少礫混じる）

P1(A-A')

- 1 黒色土（淡茶白色、黄白色粘質ブロック中量混じる、ゆるい）
- 2 地山（黄白色砂質）+茶淡色、黒色粘質ブロック

P2(B-B')

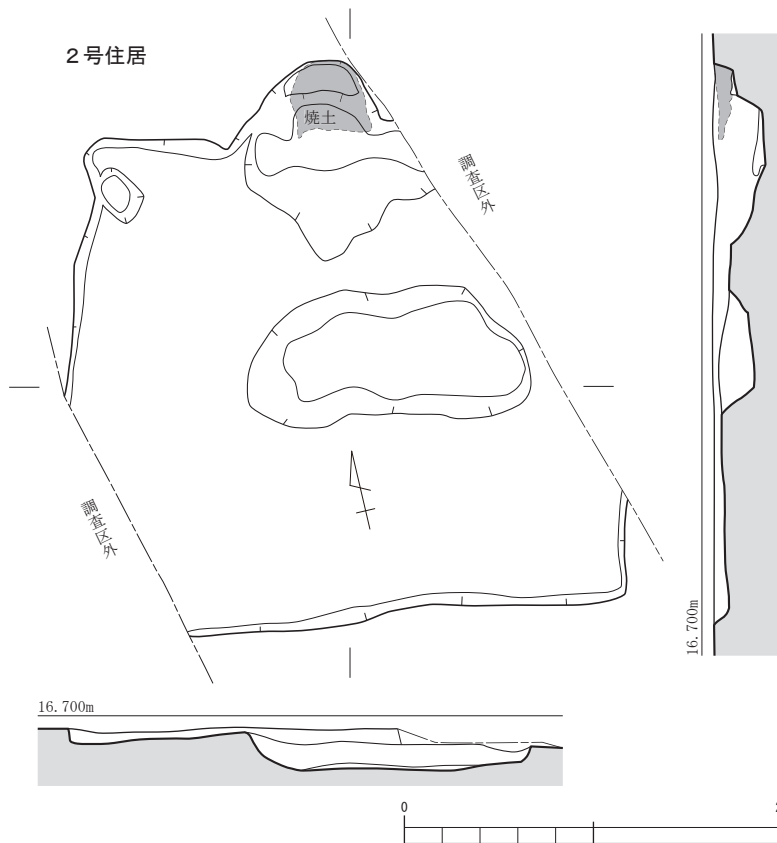
- 1 黒色土（淡茶白色、黄白色粘質ブロック中量混じる、ゆるい）
- 2 地山（黄白色砂質）+茶淡色、黒色粘質ブロック

第4図 1号竪穴住居跡実測図（S = 1/40）

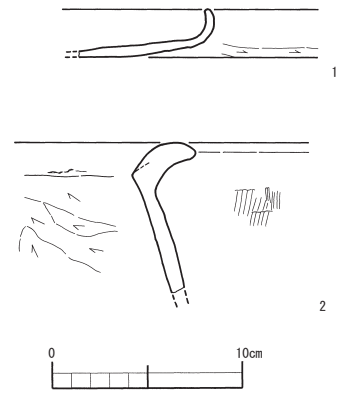
（2）掘立柱建物

今回の調査では、IV区において2棟分の掘立柱建物を確認した。いずれも南北方向棟で、南のI・II区において検出した住居方向と同様であるため密接に関連するものと思われる。

各柱穴からの遺物は極めて少なく、時期の決定に至るものはない。また、他遺構との切り合い関係も見られない。



第5図 2号竪穴住居跡実測図(S=1/40)



第6図 竪穴住居跡出土土器実測図(S=1/4)

1号掘立柱建物（第7図、図版2）

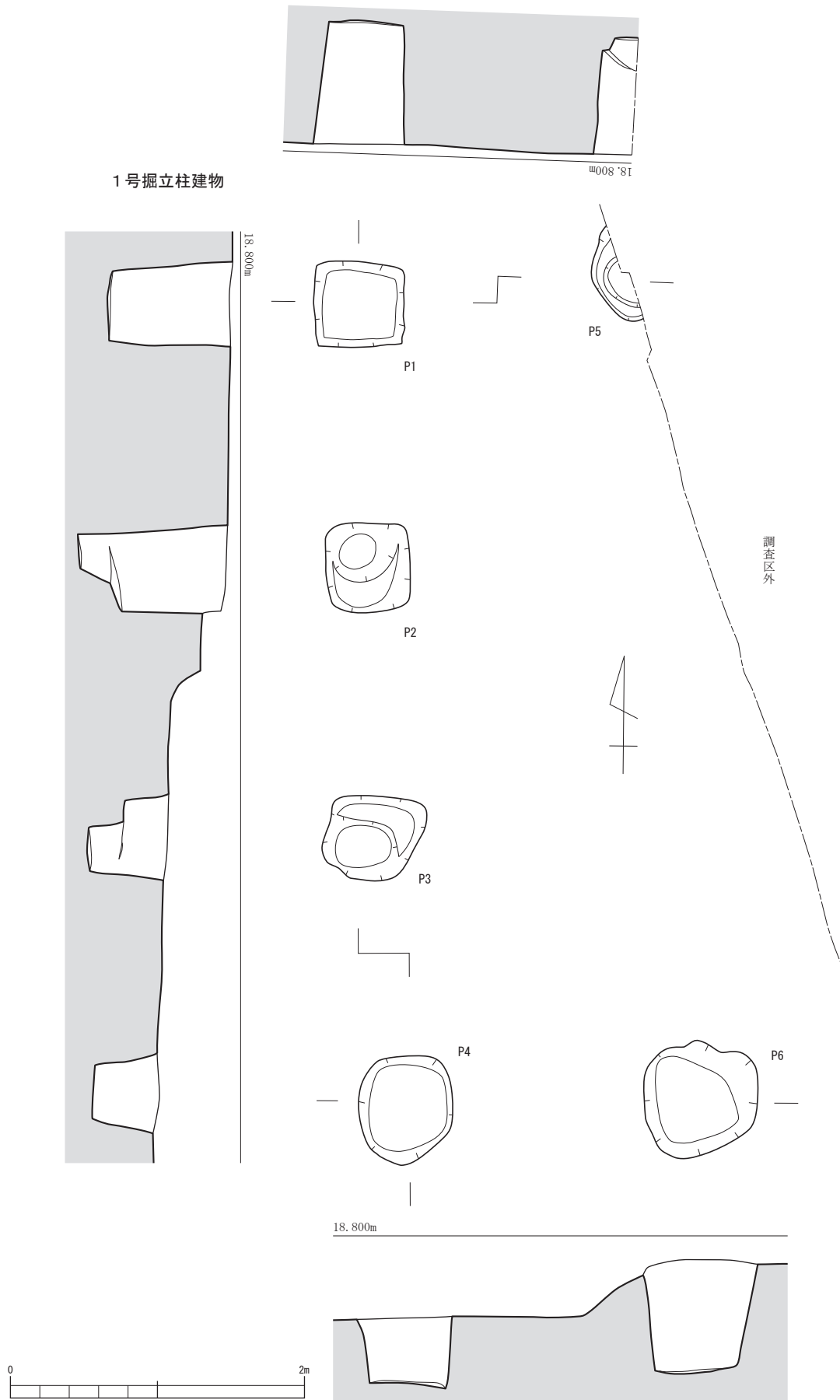
1号掘立柱建物は、IV区にて検出された南北3間（約5.5m）、東西1間（約2.0m）以上の側柱建物で、東西側は調査区外へと延びる。主軸はP4がややずれるが、ほぼ真北のN-1°-Wである。柱掘方は方形～略方形で、一辺58～76cmを測る。P3・4においては大きく削平を受けているため、現況の深さは31～45cmを測り、本来の深さは不明である。その他は検出面から76～103cmとかなり深い。柱痕や抜き取り痕は確認できておらず、埋土はいずれの柱穴も黄橙色粘質土ブロック混じりの淡黒色砂質土である。

遺物は、P1より、須恵器甕胴部片の出土があったが、細片のため図化するには至らなかった。

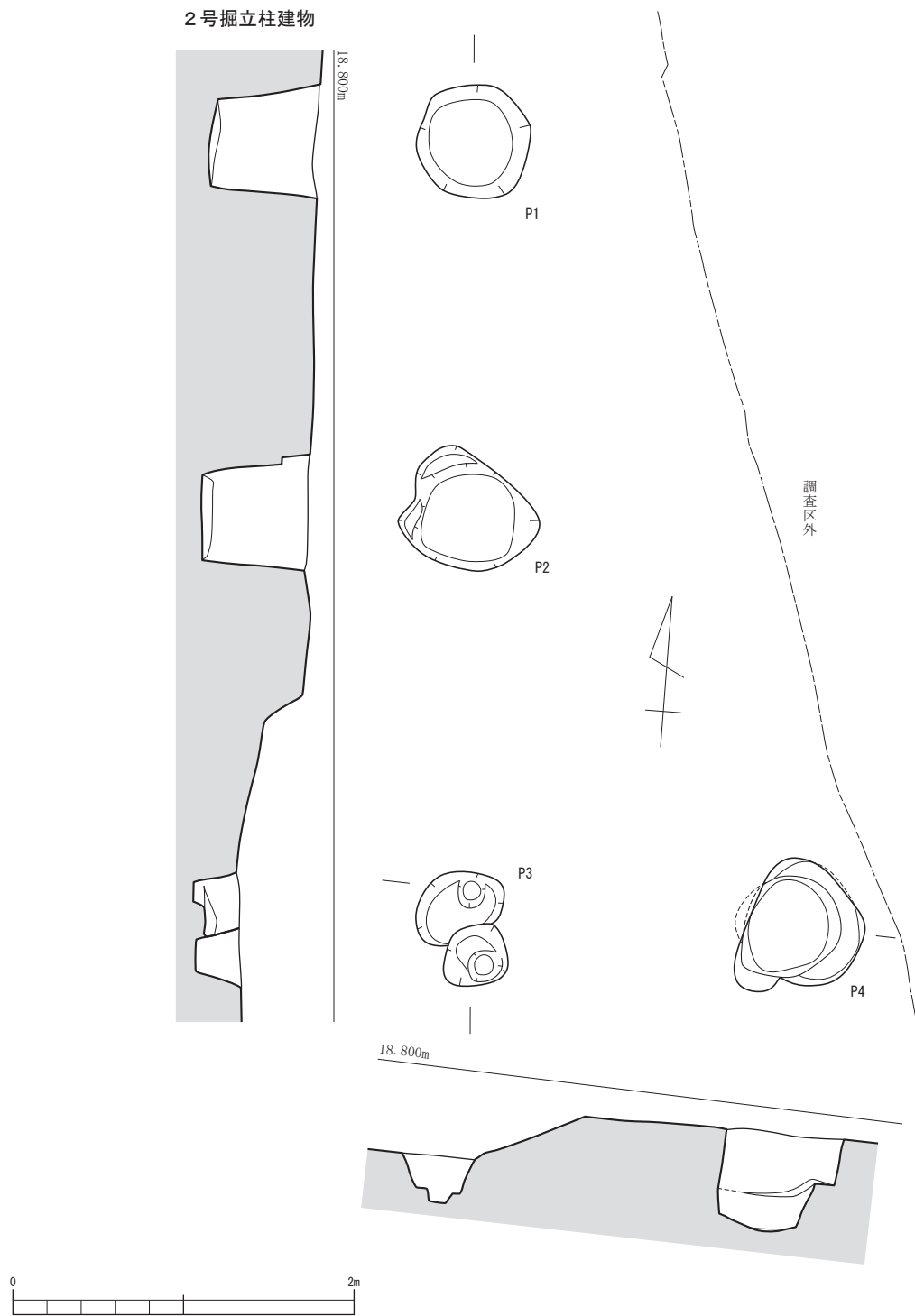
2号掘立柱建物（第8図、図版2）

2号掘立柱建物は、IV区にて検出された南北2間（約4.4m）、東西1間（1.9m）以上の側柱建物で、東西側は調査区外へと延びる。主軸はN-4°-Wである。先述した1号掘立柱建物とほぼ重なるように検出されたが、切り合いは確認できず先行関係は不明である。建て直しの可能性もあろう。柱掘方は円形～不整形円形で、径60～75cmを測る。P3は削平を受けるため本来の深さは不明であるが、他は検出面より59～64cmを測る。柱痕や抜き取り痕は確認できておらず、埋土はいずれも黄橙色粘質土ブロック混じりの淡黒色砂質土である。

いずれの柱穴からも遺物の出土はない。



第7図 1号掘立柱建物実測図(S=1/40)



第8図 2号掘立柱建物実測図 (S=1/40)

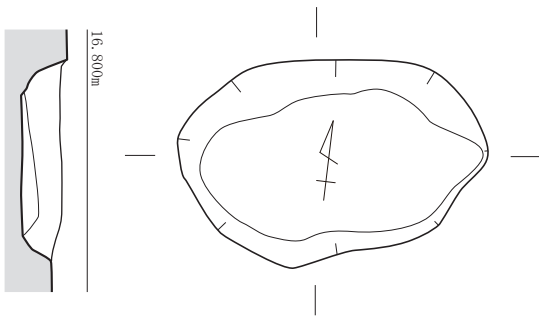
(3) 土坑

1号土坑 (第9図、図版2)

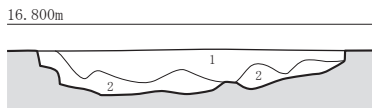
1号土坑は、I区中央部に位置する。長軸1.64m、短軸1.07mの東西に長い楕円形を呈する。検出面から底面までの深さは、16cm程度と浅い。

出土遺物 (第13図)

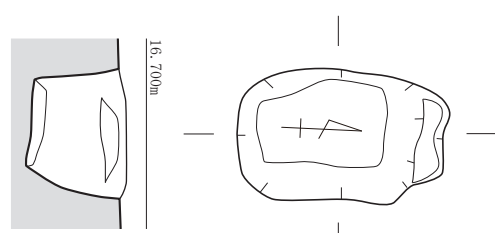
1は、土師器坏である。復元口径19.8cmを測る精製品で、内外面は回転ナデ、底部外面は手持ちヘラケズリを施す。また、底部外面にはススが付着する。2は、土師器碗である。橙褐色を呈し、復元口径17.6cmを測る精製品である。



1号土坑

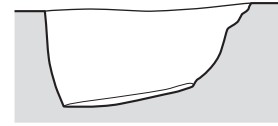


- 1号土坑
 1 淡黒色土(ゆるく、土器片含む)
 2 1層+淡黄白色砂質土(地山、ザラザラとする)

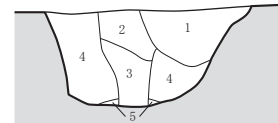


3号土坑

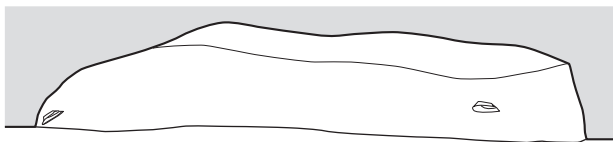
16.700m



16.700m

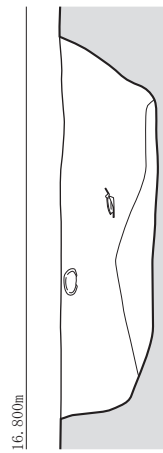
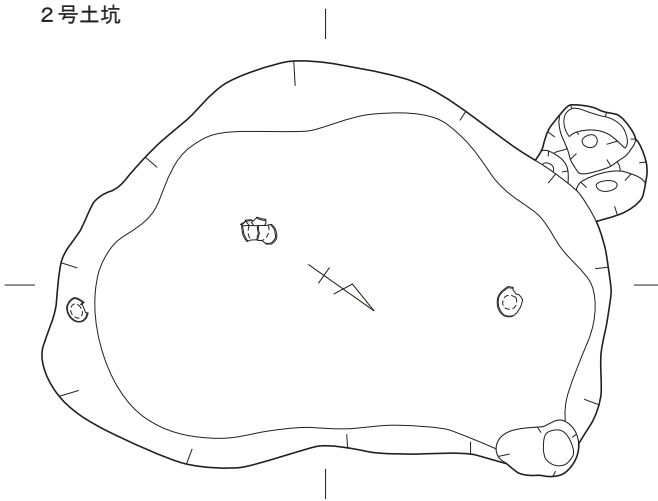


- 3号土坑
 1 灰黒色土(ややしまりあり、茶褐色粘質土ブロック含む、炭・土器片含む)
 2 淡黒色土(ゆるい、炭・土器片中量含む)
 3 淡黒色土(ゆるい、黄茶色粘質土ブロック混じる)
 4 淡黒色土(黄白色、茶褐色、黒色粘質土ブロック混じる。粘性強い)
 5 地山+4層

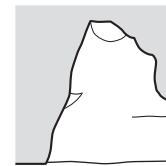


16.800m

2号土坑



16.800m



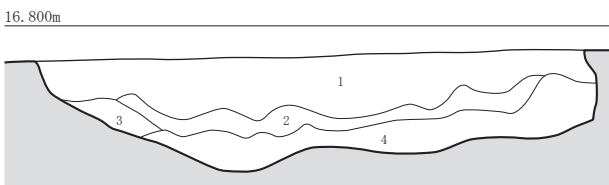
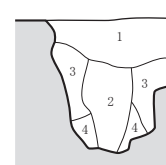
16.700m



5号土坑

調査区外

16.700m



- 2号土坑
 1 淡黒色土(ややしまりあり、土器片多量に含む)
 2 淡茶色土(均質、白色粒子、小礫含む)
 3 淡褐色土(しまる、地山やや含む)
 4 1層に似るが、地山多く混じる、土器片少量



- 5号土坑
 1 黒色土(黄橙色土ブロック少量混じる、土器片多量に含む)
 2 淡黒色土(φ~1cmの小石、土器片少量含む)
 3 淡黒色土(橙色粒、黄橙色土ブロック多く含む)
 4 灰黒色土(灰白色砂質=地山質多く含む)

第9図 1・2・3・5号土坑実測図 (S=1/40)

2号土坑（第9図、図版3）

2号土坑は、I区中央部、1号土坑の西隣に位置する。長軸2.92m、短軸2.0mの南北に長い不整形楕円形を呈する。検出面から底面までの深さは約55cmを測る。上層から下層まで多量の土器が出土し、廃棄土坑かと思われるが、土層観察では掘り込み等の確認は出来なかった。

出土遺物（第13図、図版5）

3は、土師器甕口縁～胴部にかけての破片である。復元口径21.0cmを測る。4は、土師器甕口縁部である。5～9は土師器坏である。いずれも完形品で、口径は12.5～13.6cmを測る。6については口縁部内外に油煙が付着しており、灯明皿として使用されたものであることがわかる。10は土師器椀である。11・12は須恵器坏蓋である。11は復元口径17.2cm、12は14.2cmを測る。いずれも内外回転ナデ、外面天井部はケズリ後ナデ調整される。

3号土坑（第9図、図版3）

3号土坑は、I区南部に位置する。長軸1.08m、短軸0.68mの南北に長い隅丸長方形を呈する。検出面から底面までの深さは、48cmを測る。土師器の出土はあったが、細片のみのため図化するに至らなかった。

4号土坑（第10図、図版3）

4号土坑は、I区南部、3号土坑の南側に位置する。長軸1.25m、短軸0.74mの南北に長い隅丸長方形を呈する。検出面から底面までの深さは、47cmを測る。土師器の出土はあったが、細片のみのため図化するに至らなかった。

5号土坑（第3・9図）

5号土坑は、I区中央部東壁沿いに検出した土坑である。ピットが幾つか接続するような形状を呈しているが、土坑として扱う。深さは20～88cmを測る。

出土遺物（第13図、図版5）

13は、土師器甕口縁部である。復元口径20.8cmを測る。14は、土師器坏である。復元口径14.1cmを測る。内外面は回転ナデ、底部外面はヘラ切り後ナデで調整される。15は土師器皿である。内外面は回転ナデ、底部外面は、回転ヘラケズリを施す。また、内面には油煙が付着しており、灯明皿として使用されたものであることがわかる。

6号土坑（第10図、図版3）

6号土坑は、I区南端に位置する。検出時土坑としていたものであるが、溝状の遺構が接続するものだろうか。西に隣接するII区へと延伸し、10号土坑と連結するものと思われる。

出土遺物（第13図、図版5）

16は土師器甕口縁～胴部の破片である。

17は土師器坏である。復元口径12.8cmを測る精製品である。内外面は回転ナデ、底部外面はヘラ切り後軽いナデで調整する。18は土師器皿である。内外面回転ナデ、底部外面はヘラ切り後未調整である。19は、土師器椀高台部である。

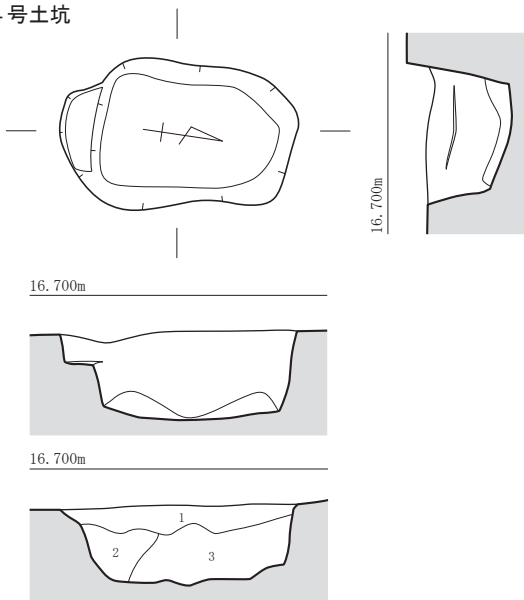
7号土坑（第10図、図版4）

7号土坑は、III区南部に位置する。調査区に掛かるため詳細は不明であるが、径0.8m程の楕円形を呈すものと思われる。検出面から底面までの深さは、74cmを測るが、包含層である3層から掘り込まれており、本来の深さは98cmを測るものである。

出土遺物（第13図）

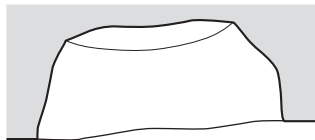
20～22は土師器甕口縁～胴部である。復元口径は、20が24.2cm、21は28.8cmを測る。いずれも内面頸部以下は強いケズリのため稜ができる。また、22は外面にススが付着する。

4号土坑



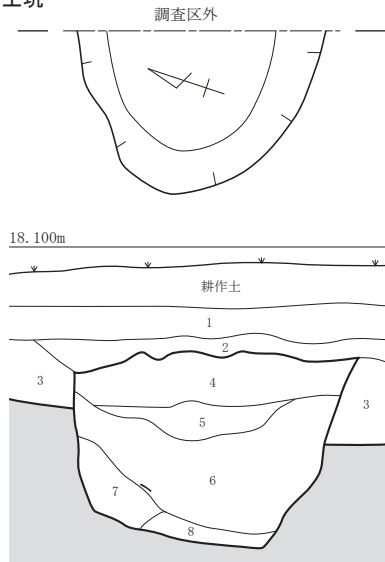
4号土坑

- 1 淡黒色土(ゆるい、黄橙色粘質土ブロック混じる、土器片・炭化物中量含む)
- 2 1層と似るが、黄白色砂質(地山)混じり、炭化物微量
- 3 淡黄橙色粘質土ブロック+褐色粘質土ブロック+黒色土



000E'2I

7号土坑

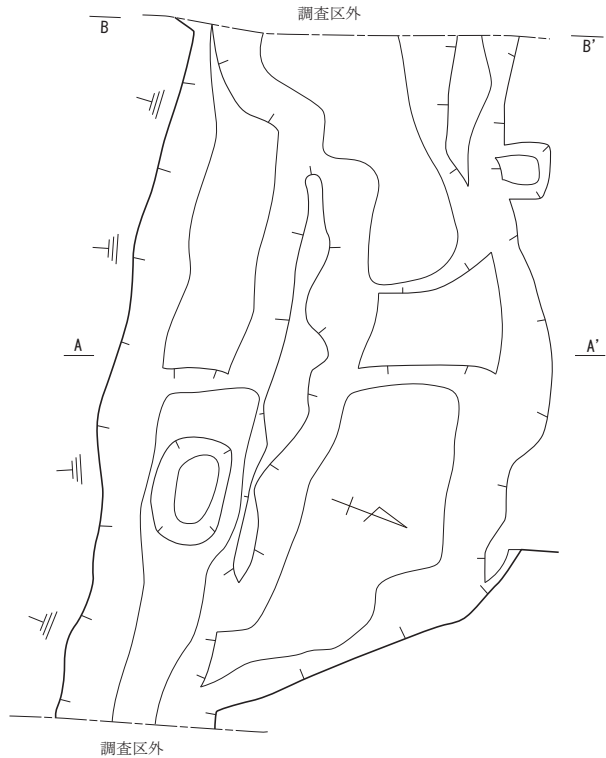


7号土坑

- 1 灰色土(砂質、よくしまる)
- 2 灰黒色土(ややしまる、砂粒・土器片多量に含む)
- 3 黒色土(ややしまる、砂粒・土器片多量に含む)
- 4 灰黒色土(白色粒子、土器片多量に含む)
- 5 淡灰褐色土(赤色土ブロック混じる、土器片多量に含む)
- 6 4層に似るが炭化物含む
- 7 4層に似るが黄茶色粘質土ブロック微量に含む
- 8 茶褐色粘質土+黒色土



6号土坑



6号土坑

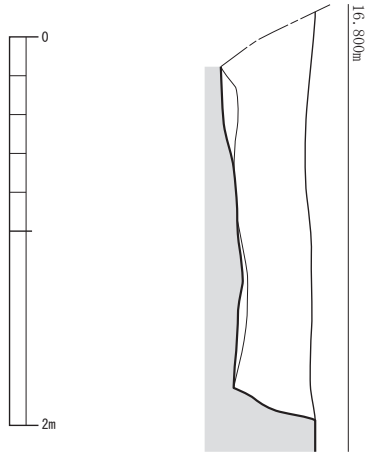
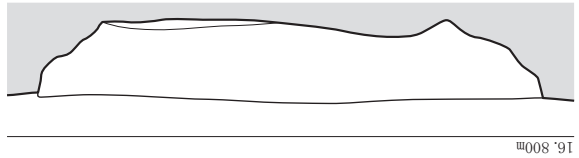
- ベルト土層 (A-A')
- 1 淡黒色土(砂粒多く混じりややしまる、土器片多量に含む)
 - 2 地山+黒色土ブロック
 - 3 1層+黄橙色粘質土ブロック
 - 4 淡黒色土(ややしまり、地山ブロック少量混じる、土器片含む)
 - 5 黒色土(ややしまり、土器片含む)

西壁土層 (B-B')

- 1 灰色土(砂質、しまる)
- 2 淡灰色土(砂質、しまる)
- 3 灰黄褐色土(砂質、しまる、礫多く含む)
- 4 3層+黄橙色粘質土ブロック(井戸建設の埋土)
- 5 灰黒色砂質土(井戸建設の埋土)
- 6 淡黒色土(砂粒多く混じりややしまる、土器片多量に含む)
- 7 淡黒色土+黄橙色粘質土ブロック
- 8 茶褐色土(やや砂質混じる、茶褐色土粒多く含む)
- 9 淡黒色土(ややしまり、地山ブロック少量混じる、土器片含む)
- 10 黒色土(ややしまり、土器片含む)

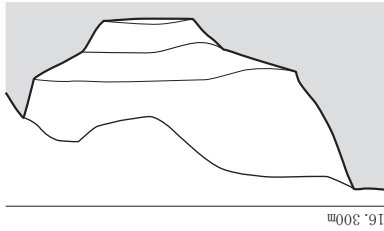
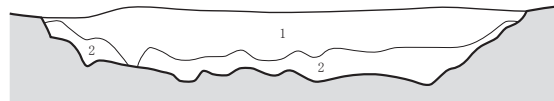
第10図 4・6・7号土坑実測図(S=1/40)

8号土坑



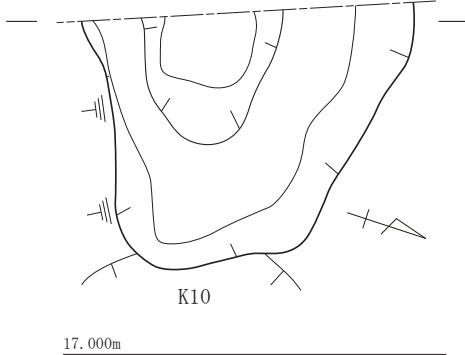
- 8号土坑
 1 淡黒色土(ゆるい、黄色土粒、土器片少量含む)
 2 1層+地山(黄褐色粘質土)

16.800m

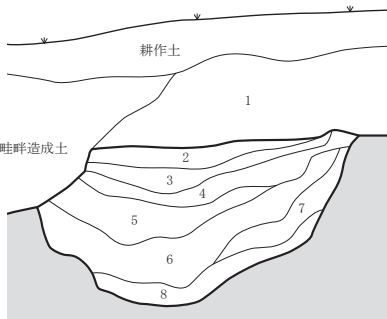


16.800m

9号土坑

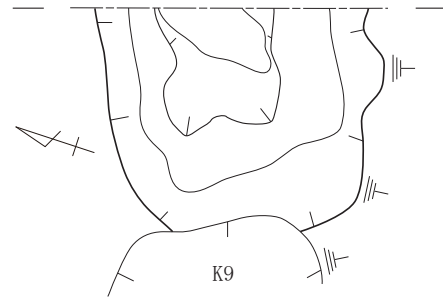


17.000m

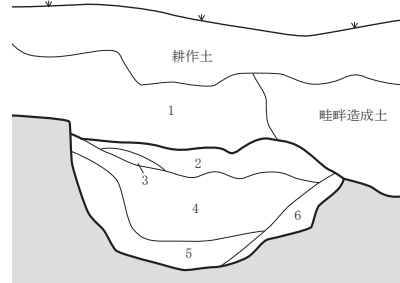


- 9号土坑
 1 淡黒色土(砂粒多く混じり、ややしまる、土器片多量に含む)
 2 黒灰色土+暗黄橙色土(ややしまり、砂粒多く含む)
 3 黒色土(ややしまり、黄白色砂質土混じる)
 4 淡黒色土(暗茶色土ブロック混じる、土器片含む)
 5 淡黒色土(ゆるい、暗茶色土粒少量含む)
 6 4層と同じ
 7 4と似るが、黄白色砂質(地山)ブロック多く混じる)
 8 黒色土(やや粘質、淡灰色粘質土ブロック少量混じる)

10号土坑



17.000m



- 10号土坑
 1 淡黒色土
 2 9号土坑の4層と同じ
 3 2層に似るが、ブロック土混ざらず
 4 灰黒色土(ゆるく、土器片中量含む)
 5 淡黒色土(やや粘質、キメ細かい)
 6 5層+黄白色砂質土(地山)

第11図 8・9・10号土坑実測図 (S=1/40)

8号土坑 (第11図、図版4)

8号土坑は、Ⅱ区中部に位置する。調査区に掛かるため詳細は不明であるが、径2.5m程の不定円形を呈すものと思われる。検出面から底面までの深さは最大43cmを測り、底面は凹凸が著しい。廃棄土坑かと思われるが、土層観察においては掘り込み等の確認はできなかった。土師器甕等の出土があったが、いずれも細片のため図化するに至らなかった。

9号土坑 (第11図、図版4)

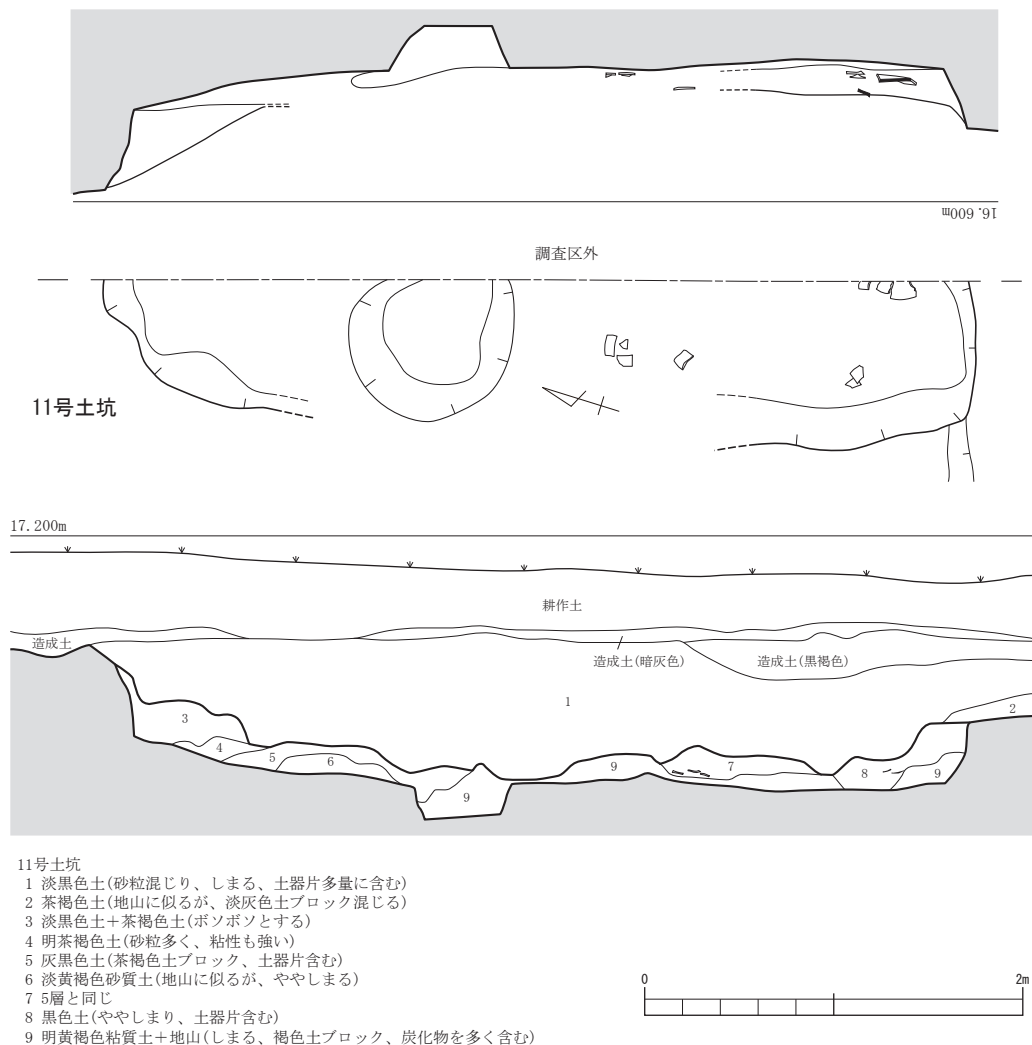
9号土坑は、Ⅱ区南端に位置し、10号土坑を切る。現況、(1.3) × 1.7 mを測る。本来は楕円形を呈するものであろうか。深さは80cmを測る。

出土遺物 (第13図)

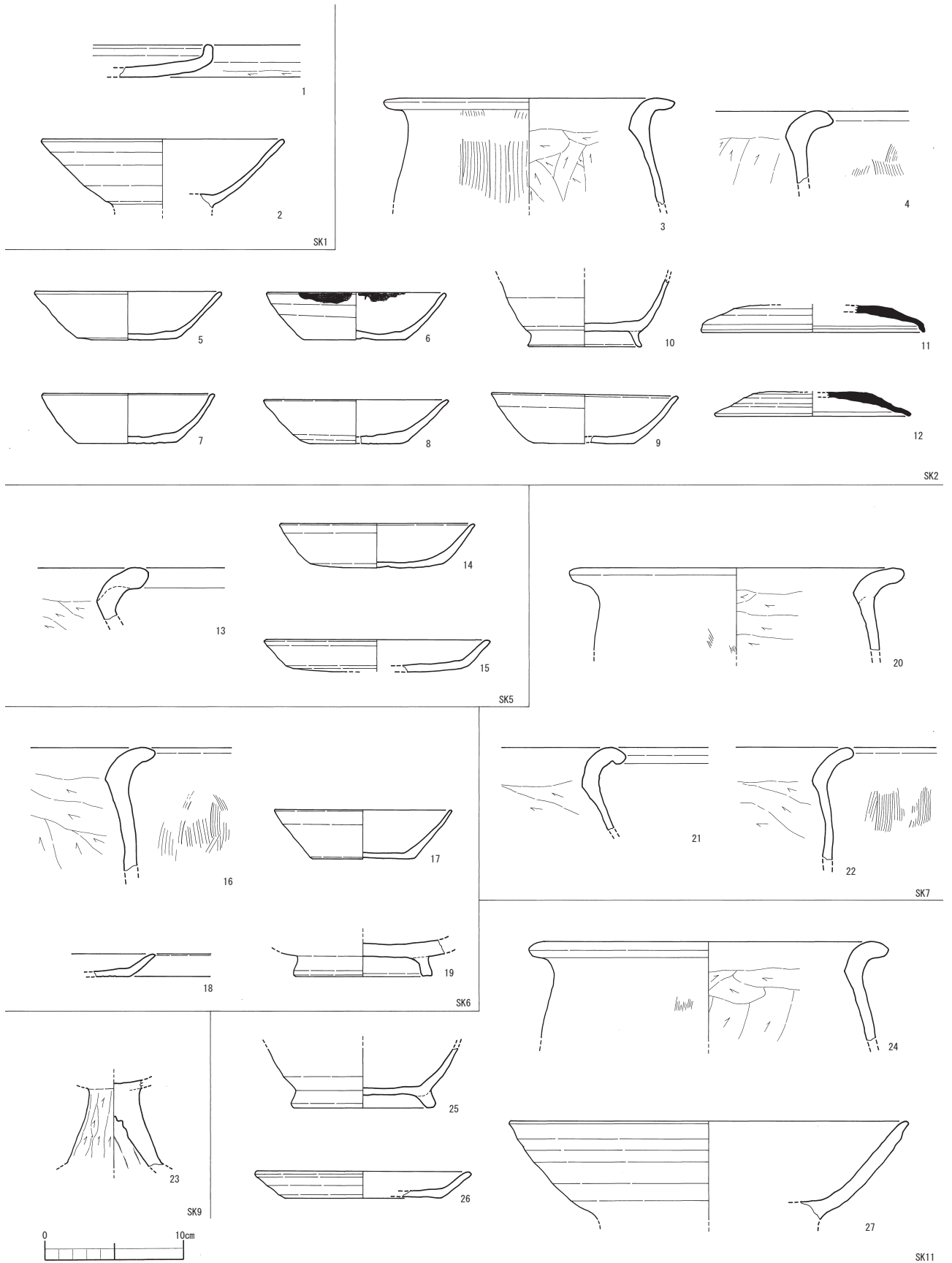
23は、土師器高坏脚部である。精製品で、外面は縦方向のヘラケズリを行い、内面は丁寧なナデを施す。不明瞭ではあるが、内面にはシボリ痕が残る。

10号土坑 (第11図、図版4)

10号土坑は、Ⅱ区南端に位置し、9号土坑に切られる。現況1.14 × 1.3 mを測る。道路を挟んだ東側のⅠ区南端の6号土坑と接続して、溝状を呈する可能性もあるが詳細は不明である。土師器片の出土があったが、細片のため図化するに至らなかった。



第12図 11号土坑実測図 (S=1/40)



第13图 1·2·5 ~ 7·9·11号土坑出土土器实测图 (S=1/4)

11号土坑（第12図、図版4）

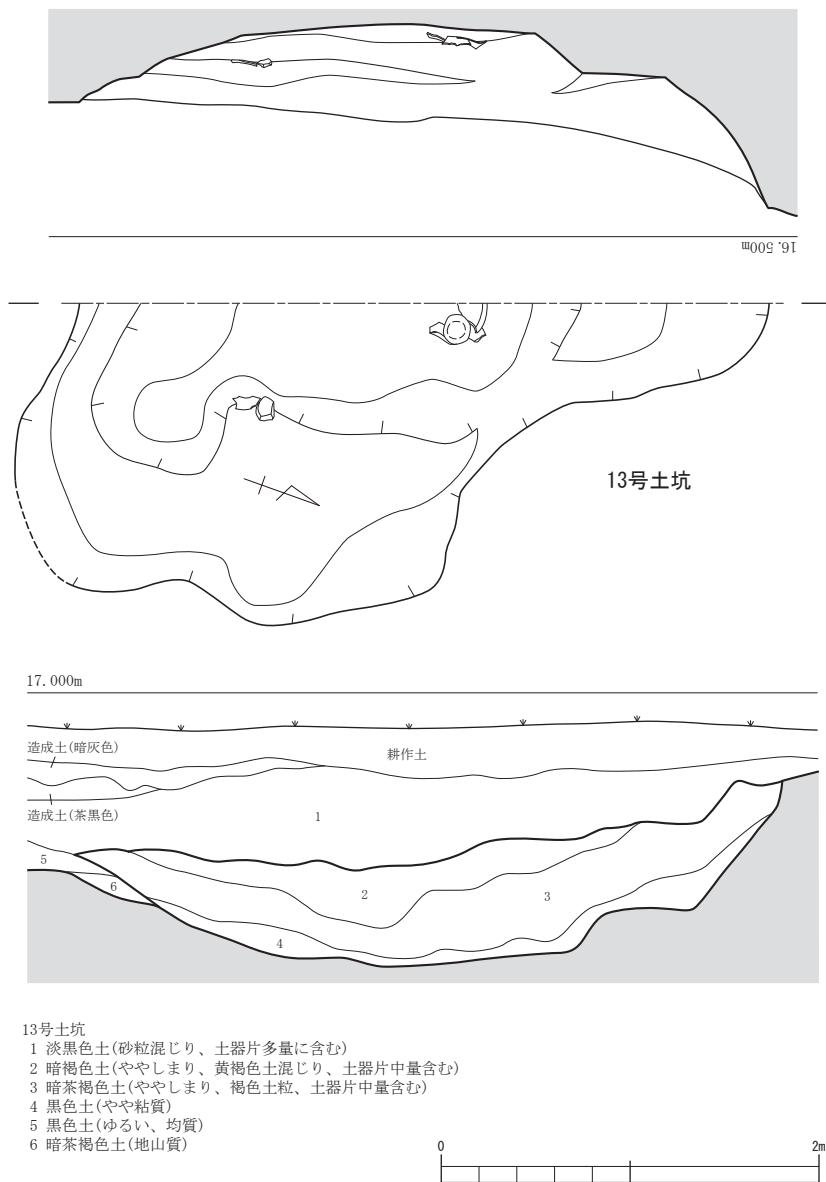
11号土坑は、Ⅱ区南部に位置する。13号土坑と切り合う。検出段階において遺構上部には包含層が被っている状態であった。そのため、重機による包含層の掘削を行い、切り合いの判別を行った。土坑内最下層（第9層）には大量の炭化材が含まれており別遺構からの廃棄土であることが想定できる。

出土遺物（第13図、図版5）

24は土師器甕口縁部である。復元口径26.0cmを測る。内面頸部以下はケズリを行い明瞭な稜ができています。25は土師器碗である。口縁部は欠損する。26は土師器皿である。内外面回転ナデで調整、底部はヘラ切り後未調整のままである。27は復元口径28.9cmを測る。高台は欠損する。大型の坏とすると余にも口径が大きく、また皿だとすると余にも体部が深い。管見では類例を見ない。

13号土坑（第14図、図版4）

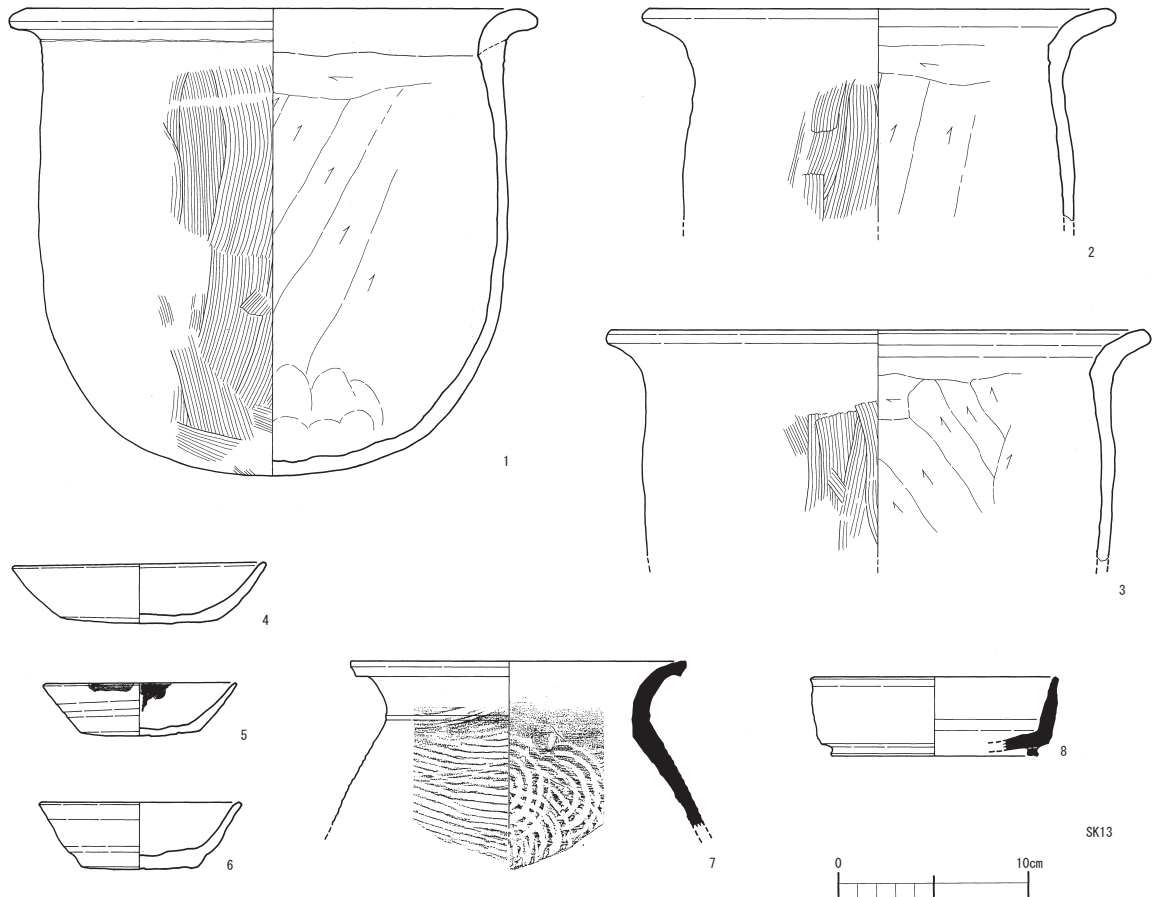
13号土坑は、Ⅱ区南部、11号土坑に隣接する。包含層が厚く被っており、重機によって剥ぎ取ってから切り合いの判別を行った。調査区に掛かるため全容は不明であるが、現況1.6×3.64mの不整楕円形を呈する。検出面からの深さは99cmを測る。



第14図 13号土坑実測図 (S=1/40)

出土遺物（第15図、図版6）

1～3は土師器甕である。1は、口径27.8cmを測る。2は復元口径25.0cm、3は28.8cmを測る。いずれも、内面頸部以下は強いケズリのため明瞭な稜ができていている。4～6は土師器坏である。口径10.2～13.4cmを測る。いずれも内外回転ナデ、底部外面はヘラ切りで調整される。5には口縁部に油煙の付着が見られ、灯明皿として使用されたことがわかる。7は須恵器甕口縁部である。復元口径16.8cmを測る。内面は青海波当て具痕、外面は平行タタキによる。8は須恵器坏である。復元口径13.1cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、底部との境が明瞭である。高台も低く、端部よりも内側に付く。



第15図 13号土坑出土土器実測図（S=1/4）

（4）ピット【SP】

本調査では多数のピットを検出したが、1・2号掘立柱建物の他に建物跡となるようなものは確認できなかった。また遺物の出土も少なく、本項では遺物の出土のあったSP-29・30・33・41の4基について規模等の資料提示を行うものとする。

SP-29（第3図）

SP-29は、Ⅱ区東壁沿いにて検出した。調査区外に掛かるため詳細は不明であるが、径36cm程の円形を呈するものと思われる。底面は、平坦である。検出面からの深さは58cmを測る。

出土遺物（第16図、図版6）

1は、須恵器皿である。復元口径15.6cm、器高1.7cmを測る。内外面とも回転ナデを施し、底部外面は糸切り後軽いナデで調整する。生焼け品で、灰黄白色を呈する。

SP-30 (第3図)

SP-30は、Ⅱ区東壁沿い、SP-29の西隣に位置する。長軸34cm、短軸24cm、深さ45cmを測り、楕円形を呈する。底面は平坦である。

出土遺物(第16図、図版6)

2は、須恵器坏蓋である。復元口径13.5cm、器高1.45cmを測る。内面は回転ナデ、外面天井部は回転ヘラケズリを施す。また、内面天井部にはかなり磨滅しているが、墨が付着しており、硯として転用されていたことがわかる。

SP-33 (第3図)

SP-33は、Ⅱ区東壁沿い、SP-の北60cm程に位置する。長軸50cm、短軸30cm、深さ59cmを測り、楕円形を呈する。上端から30cm程下にテラスを有する。底面は平坦である。

出土遺物(第16図)

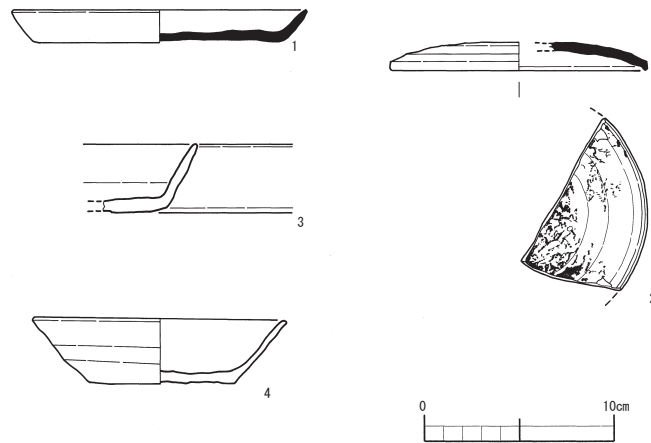
3は、土師器坏である。器高3.6cmを測る。内外面とも回転ナデ、底部外面はヘラ切り後ナデ調整を行う。

SP-41 (第3図)

SP-41は、Ⅰ区南部、3・4号土坑の東に位置する。径28cm程の円形を呈するものと思われる。深さは47cmを測り、上端から30cm程下に三日月状のテラスを一段有する。

出土遺物(第16図、図版6)

4は土師器坏である。精製品で、口径13.5cm、器高3.5cm、底径7.7cmを測る。内外面とも回転ナデ、底部外面はヘラ切り後未調整のままである。



第16図 ピット出土土器実測図(S=1/4)

第4章 調査の成果

今回の調査では、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物2棟、土坑12基、ピット多数が検出された。以下では、当遺跡を構成する各種遺構を概観しながら成果をまとめ、締めくくる事にしたい。

・竪穴住居 2軒検出された竪穴住居は、小型で方形のプランを呈する。どちらも主軸方位はN-10°-Eを測る。主柱穴は確認できておらず、柱を持たないものと思われる。カマドは、住居壁体を外に掘り込んで構築するタイプで、設置位置はどちらも北壁である。主軸方位、カマド設置位置など、どちらも同様であり、所属集団内の方向規制が窺える。

出土遺物は、削平を受けているため量が少なく、また出土したのも破片のみのため時期決定が難しいが、8世紀中頃を上限と見てよいだろう。

・掘立柱建物 建物は2軒検出された。いずれも主軸が現状南北をとるが、調査区外へと延びるため詳細は不明である。建物を構成する各柱穴からの出土遺物が少なく、また切りあう遺構も存在しないため時期の確定が困難である。はっきりと言えることは、やや南にて検出された竪穴住居跡と方位が近似するという点である。

・土坑 12基の土坑が検出された。本調査区の北側を中心として集落域が広がると思われるが、集落域の直ぐ側ではなく、南側を中心に土坑・廃棄土坑が掘削されている様子が窺えた(第3図)。詳細は不明であるが、南側の段丘の落ち際箇所がそうした土坑・廃棄土坑の掘削場所として認識されていたのであろう。

土坑内から出土した土器の中には、第13図5～9の様に、9世紀に入るであろう遺物も多数見られた。本文中でも触れたが、北部のIV区以外には包含層がかなり厚く乗っており、最大で50cmを測る箇所もある。包含土中の遺物時期は9世紀を中心とするものである。そのため、各遺構の上層にて出土したものについては多分にその包含層中の遺物が含まれていると考える事ができよう。それ以外で見ると、やはり8世紀中～後半頃のものを中心となるようである。

今回の調査は、幅の狭いトレンチ状の調査区ではあったが、8世紀中頃～後半にかけての集落の一部が確認できた。また、段丘崖沿いに位置する集落の土地利用の様子をも窺う事ができた。

当該時期の集落は周辺に、谷を挟んだ南部の丘陵上にある上岩田遺跡・薬師堂遺跡・薬師堂東遺跡、そして当地と同丘陵上の北東2kmに位置する干潟遺跡群が挙げられる。

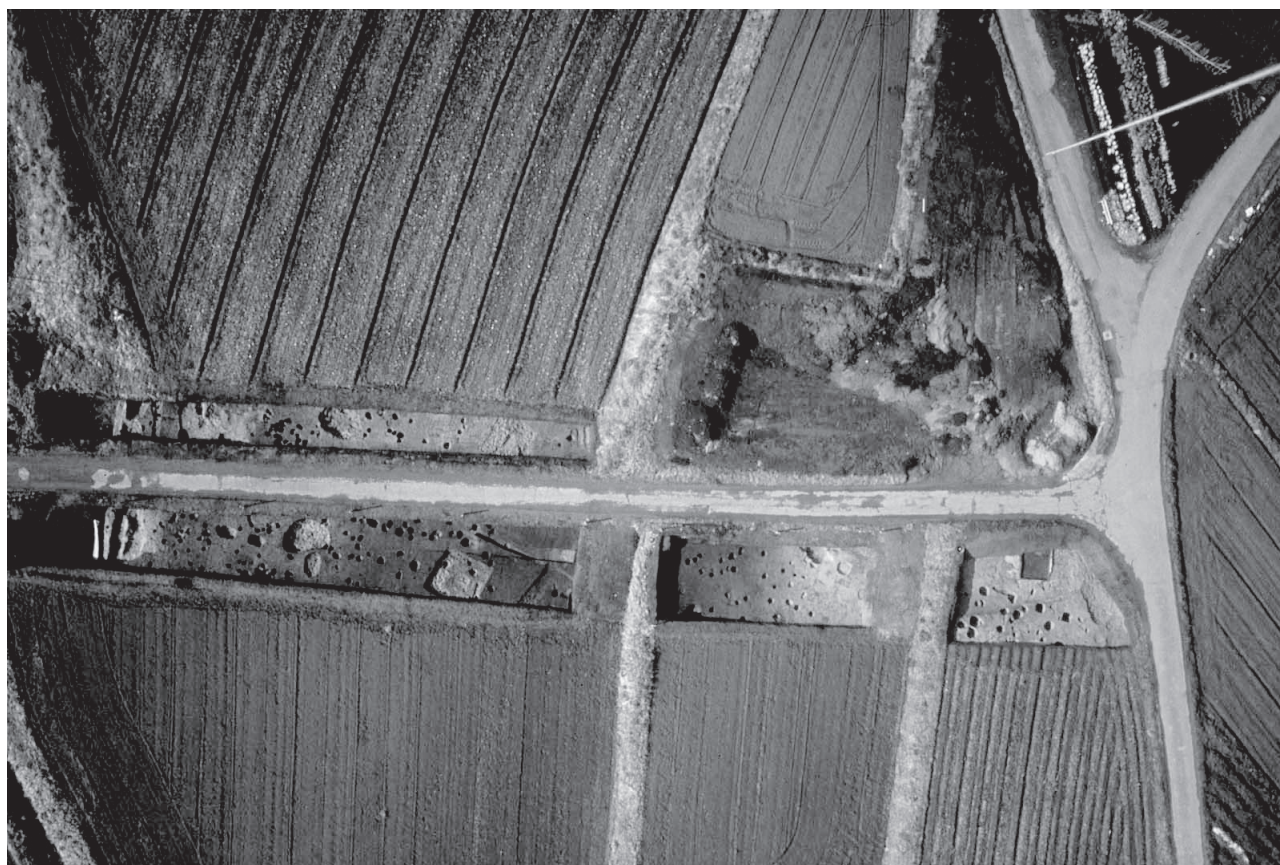
今後、当集落の全体像をはじめ、周辺に広がる両大集落との具体的な関係を掴むことが重要であり、今後の調査が期待されるものである。

第1表 出土遺物観察表

出土遺構	挿図番号	図版番号	種類	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	成形・調整	備考
					口径	底径	器高					
1号竪穴住居	6-1	5	土師	皿	—	—	2.5	内外:橙色	精良、φ~1mmの細砂僅かに含む	良好	内外:回転ナデ 底部外面:手持ちヘラケズリ	
2号竪穴住居	6-2	5	土師	甗	(29.1)	—	—	内:灰褐色 外:赤褐色	精良、φ~2mmの砂粒含む	良好	口内外:ヨコナデ 内:ヘラケズリ 外:ハケメ	内面スス付着
1号土坑	13-1	—	土師	皿	(19.8)	—	1.3	内外:橙色	φ~3mmの砂粒含む	良	内外:回転ナデ 底部外面:手持ちヘラケズリ	
	13-2	—	土師	椀	(17.6)	—	—	内外:橙色	精良	良好	内外:回転ナデ	
2号土坑	13-3	5	土師	甗	(21.0)	—	—	内外:赤褐色	φ~3mmの砂粒中量含む	良	口内外:ヨコナデ 内:ヘラケズリ 外:ハケメ	
	13-4	—	土師	甗	(29.4)	—	—	内:淡褐色 外:黄褐色	φ~2mmの砂粒含む	良	口内外:ヨコナデ 内:ヘラケズリ 外:ハケメ	
	13-5	5	土師	坏	13.6	—	3.5	内外:赤褐色	精良	良好	内外:回転ナデ 底部外面:ヘラ切り後ナデ	
	13-6	5	土師	坏	13.0	7.4	3.4	内外:橙色	精良	良好	内外:回転ナデ 底部外面:ヘラ切り後ナデ	口縁油煙付着
	13-7	5	土師	坏	12.5	7.1	3.6	内外:橙~淡黒色	精良	良好	内外:回転ナデ 底部外面:ヘラ切り後未調整	
	13-8	5	土師	坏	13.4	7.8	3.1	内外:黄褐色	精良	良好	内外:回転ナデ 底部外面:ヘラ切り後ナデ	
	13-9	5	土師	坏	13.5	7.6	3.5	内外:淡褐色	精良、φ~1mmの細砂含む	良好	内外:回転ナデ 底部外面:ヘラ切り後ナデ	
	13-10	5	土師	坏	—	8.2	—	内外:橙色	精良	良好	内外:回転ナデ 底部外面:ケズリ後ナデ	
	13-11	—	須	坏蓋	(17.2)	—	1.9	内外:暗灰色	精良	堅緻	内外:回転ナデ 天井部外面:ケズリ後ナデ	
	13-12	5	須	坏蓋	(14.2)	—	1.75	内外:暗灰色	精良	堅緻	内外:回転ナデ 天井部外面:ケズリ後ナデ	
5号土坑	13-13	—	土師	甗	(20.8)	—	—	内外:淡黄褐色	φ~2mmの砂粒中量含む	良	口内外:ヨコナデ 内:ヘラケズリ	
	13-14	5	土師	坏	(14.1)	—	3.15	内外:橙色	精良	良	内外:回転ナデ 底部外面:ヘラ切り後ナデ	
	13-15	5	土師	皿	(16.4)	—	2.3	内外:赤褐色	精良	良好	内外:回転ナデ 底部外面:回転ヘラケズリ	内面油煙付着
6号土坑	13-16	—	土師	甗	—	—	—	内外:淡褐色	φ~7mmの砂粒・礫含む	良	口内外:ヨコナデ 内:ヘラケズリ 外:ハケメ	外面スス付着
	13-17	5	土師	皿	(16.1)	—	1.6	内外:淡黄白色	精良	良	内外:回転ナデ 底部外面:ヘラ切り	
	13-18	—	土師	坏	(12.8)	(7.6)	3.5	内外:淡黄褐色	精良	良好	内外:回転ナデ 底部外面:ヘラ切り後ナデ	
	13-19	—	土師	坏	—	10.0	—	内外:橙色	精良、φ~1mmの細砂含む	良好	内外:回転ナデ	
7号土坑	13-20	—	土師	甗	(24.2)	—	—	内:淡灰色 外:淡黄色	φ~2mmの砂粒含む	良	口内外:ヨコナデ 内:ヘラケズリ 外:ハケメ	
	13-21	—	土師	甗	(28.8)	—	—	内外:淡褐色	φ~2mmの砂粒含む	良好	口内外:ヨコナデ 内:ヘラケズリ	
	13-22	—	土師	甗	—	—	—	内外:黄褐色	φ~3mmの砂粒含む	良	口内外:ヨコナデ 内:ヘラケズリ 外:ハケメ	外面スス付着
9号土坑	13-23	—	土師	高坏	—	—	(6.25)	内外:淡褐色	精良	良	内:ナデ、シボリ痕残る 外:ヘラケズリ	
11号土坑	13-24	5	土師	甗	(26.0)	—	—	内外:淡褐色	φ~3mmの砂粒中量含む	良	口内外:ヨコナデ 内:ヘラケズリ 外:ハケ後ナデ	
	13-25	5	土師	椀	—	(10.1)	—	内外:橙色	精良	良好	内外:回転ナデ 底部外面:ヘラ切り後粗いナデ	
	13-26	5	土師	皿	(15.7)	(11.2)	1.9	内外:橙色	φ~1mm以下の細砂含む	良好	内外:回転ナデ 底部外面:回転ヘラきり	
	13-27	5	土師	鉢?	(28.9)	—	—	内外:黄褐色	精良、細砂僅かに含む	良	内外:回転ナデ	
13号土坑	15-1	6	土師	甗	27.8	—	24.6	内外:黄褐色	φ~2mmの砂粒中量含む	良好	口内外:ヨコナデ 内:ケズリ、ユビオサエ 外:ハケ	
	15-2	—	土師	甗	(25.0)	—	—	内外:淡褐色	φ~2mmの砂粒含む	良	口内外:ヨコナデ 内:ヘラケズリ 外:ハケ	
	15-3	—	土師	甗	(28.8)	—	—	内外:淡橙~黄褐色	φ~3mmの砂粒中量含む	良好	口内外:ヨコナデ 内:ヘラケズリ 外:ハケ	
	15-4	6	土師	坏	13.4	—	3.1	内外:黄褐色	精良	良好	内外:回転ナデ 底部外面:ヘラ切り後ナデ	
	15-5	6	土師	坏	10.2	—	2.7	内外:淡黄褐色	精良	良好	内外:回転ナデ 底部外面:ヘラ切り	口縁油煙付着
	15-6	—	土師	坏	(10.7)	—	3.5	内外:淡褐色	精良、φ~1mmの細砂含む	良	内外:回転ナデ 底部外面:ヘラ切り後ナデ	
	15-7	6	須	甗	(16.8)	—	—	内外:灰色	精良	堅緻	口内:回転ナデ 口外:ヨコナデ 内:青海波当て具痕 外:平行タタキ	
	15-8	—	須	坏	(13.1)	(11.0)	4.15	内外:灰~暗灰色	精良	堅緻		
SP29	16-1	6	須	皿	(15.6)	(13.1)	1.7	内外:灰黄白色	φ~2mmの砂粒中量含む	軟質	内外:回転ナデ 底部外面:ヘラ切り後ナデ	
SP30	16-2	6	須	坏蓋	(13.5)	—	1.45	内外:淡灰色	φ~2mmの砂粒含む	やや軟質	内外:回転ナデ 天井部外面:回転ヘラケズリ	転用硯
SP33	16-3	—	土師	坏	—	—	3.6	内外:淡褐色	φ~1mm以下の細砂含む	良好	内外:回転ナデ 底部外面:回転ヘラ切り	
SP41	16-4	6	土師	坏	13.5	7.75	3.5	内外:淡褐色	精良、赤色粒子含む	良好	内外:回転ナデ 底部外面:回転ヘラ切り	



調査区より東を望む

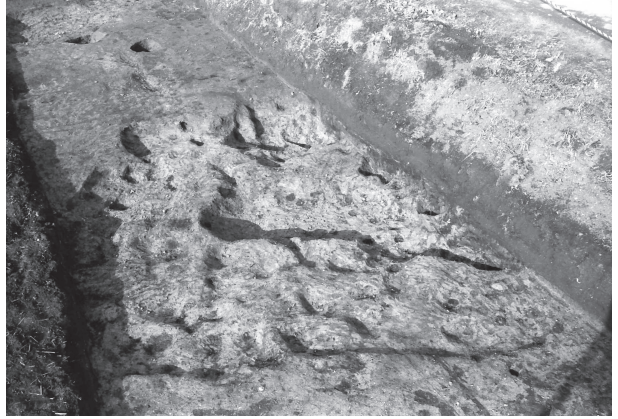


干潟東畑遺跡調査区全景

图版2



1号住居土層(東西)



2号住居完掘



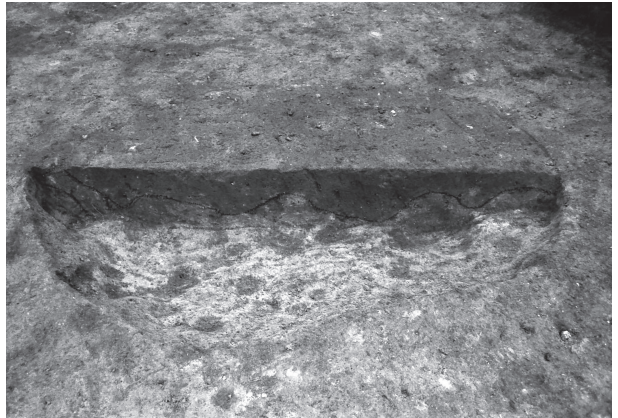
1号住居土層(南北)



1・2号掘立柱建物全景



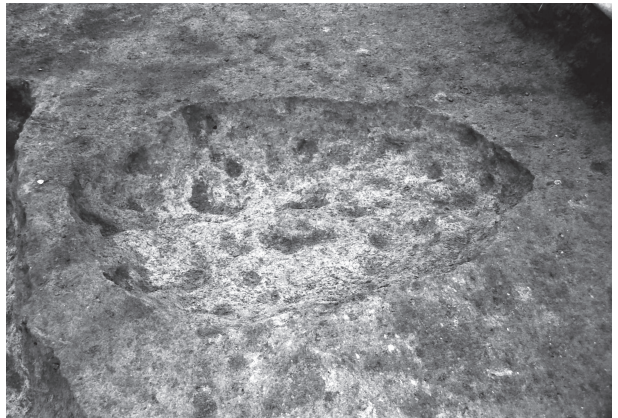
1号住居貼床検出状況



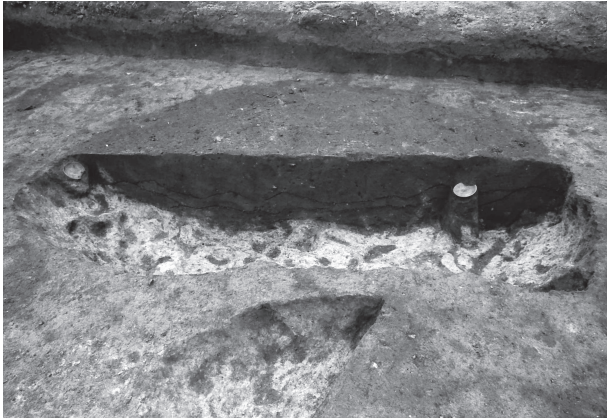
1号土坑土層



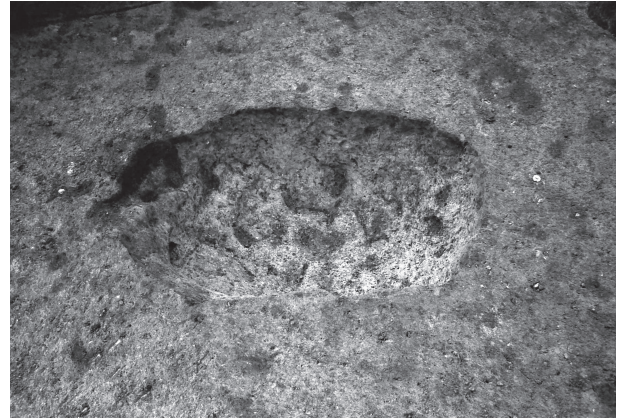
1号住居完掘



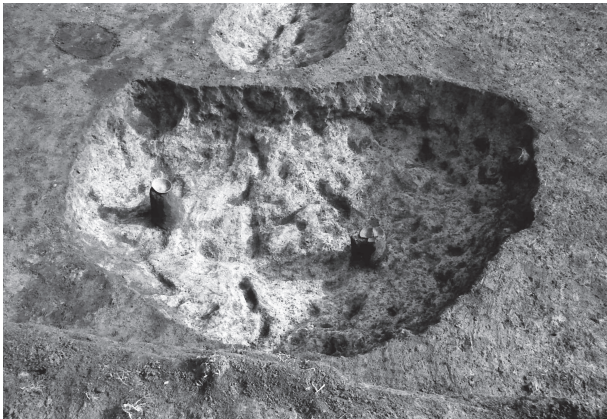
1号土坑完掘



2号土坑土層



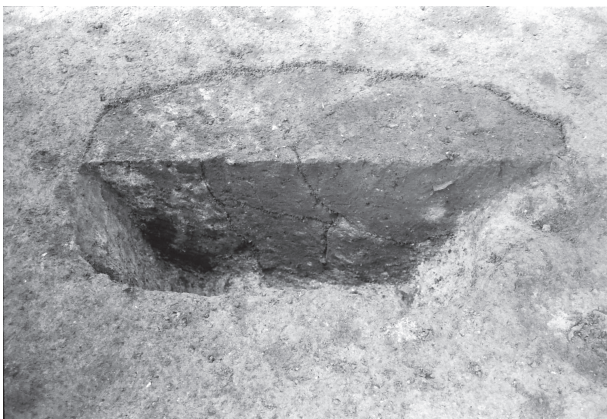
4号土坑完掘



2号土坑完掘



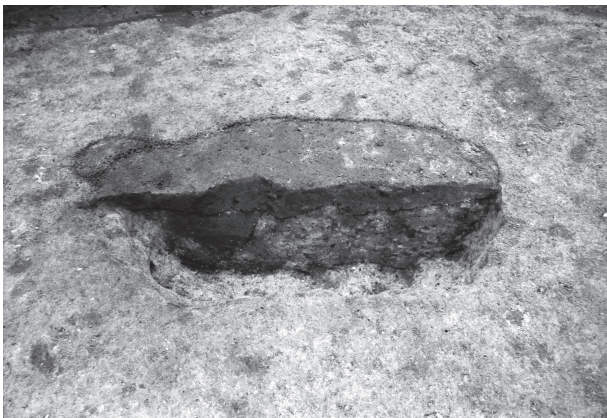
6号土坑土層(A-A')



3号土坑土層



6号土坑土層(B-B')



4号土坑土層

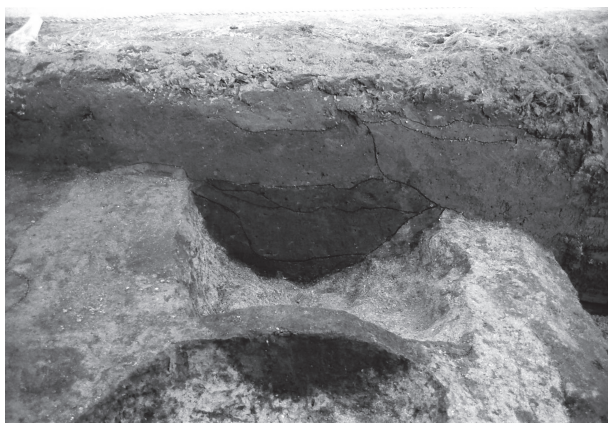


6号土坑完掘

图版4



7号土坑



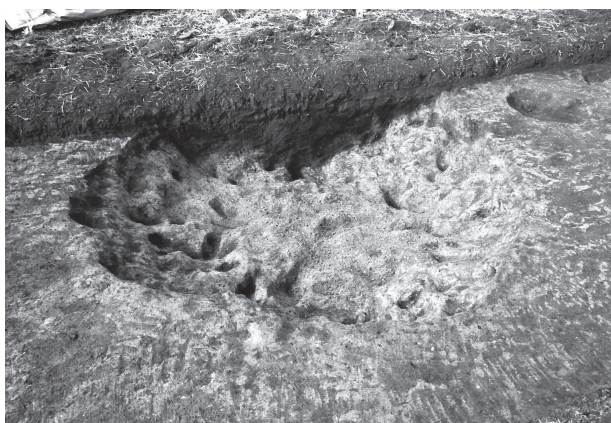
10号土坑



8号土坑土层



11号土坑土层①



8号土坑完掘



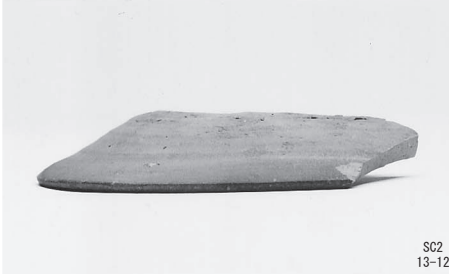
11号土坑土层②



9号土坑



13号土坑土层



图版6



報告書抄録								
ふりがな	ひかたひがしはたいせき							
書名	干潟東畑遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第258集							
編著者名	坂井 貴志							
編集機関	小郡市教育委員会 小郡市埋蔵文化財調査センター							
所在位置	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5147-3 TEL 0942-75-7555							
発行年月日	平成23年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	しよざいち 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
ひかたひがしはた 干潟東畑 いせき 遺跡	ふくおかけん 福岡県 おごおりし 小郡市 ひかた 干潟	40216		33° 24' 24"	129° 04' 56"	2009.12.2) 2010.2.23	630 m ²	道路改良事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
干潟東畑 遺跡	集落	古代		竪穴住居跡 掘立柱建物 土坑 廃棄土坑 ピット群		土師器 須恵器		
<p>干潟東畑遺跡は、小郡市を縦断する宝満川東岸、花立山西側に広がる低位段丘上の標高17m前後に立地する。調査の結果、竪穴住居2軒、掘立柱建物2棟、土坑12基、ピット多数を検出した。時期は概ね8世紀中頃～後半にかけてである。当地周辺に広がる集落の一端として捉えることができ、地域の発展過程を考える上で不可欠な成果となった。</p>								

干潟東畑遺跡

小郡市文化財調査報告書第258集

平成23年3月31日

発行 小郡市教育委員会

福岡県小郡市小郡255-1

出版 片山印刷(有)

福岡県小郡市祇園1-8-15

